

追悼

■山中龍彦先生を偲んで

大阪大学レーザーエネルギー学研究中心長
疇地 宏

本学会の大先輩であり、副会長・理事を務められ、長年にわたり本学会のために多大な貢献をなされた山中龍彦先生が、2015(平成27)年2月26日に享年75歳でご逝去されました。

山中龍彦先生は、1968(昭和43)年11月大阪大学大学院工学研究科電気工学専攻博士課程を単位取得退学後、大阪大学工学部助手、1972(昭和47)年7月同助教授、1974(昭和49)年4月名古屋大学プラズマ研究所助教授、1980(昭和55)年3月大阪大学教授を経て、1999(平成11)年4月にレーザー核融合研究センター長に就任され、2003(平成15)年3月に定年退官されるまで同センター長としてセンターの発展に尽力されました。その後も、2011(平成23)年3月に退職されるまで、福井工業大学教授として教鞭を取るとともに、大所高所から本学会の発展にお心遣いのご指導をいただいております。

故人に最初にお会いしたのは1975(昭和50)年名古屋大学プラズマ研究所で輪講に参加させていただいた時です。故人は天才肌で、物事をあっという間に直感で理解するも、口下手でそれを説明しないものですから、知識の足りない学生にとっては付いていくのが誠に大変でもあり、また楽しくもあった、いわば長島茂雄のような方でした。

さて、故人の大きなお仕事を3つ紹介したいと思います。一つ目は、プラ研時代になされた異常吸収の発見と核融合中性子の発生です。レーザーが強くなると温度が上がりプラズマに吸収されなくなると思われていましたが、故人はこの常識を覆し、レーザー核融合が可能であることを示しました。これを契機としてレーザー研が発足するとともに、世界的にもローレンスリバモア国立研究所やロチェスター大学など同時期に創立され、レーザー核融合の本格的な研究の幕が開けました。

二つ目は、1983(昭和58)年に阪大レーザー研で激光Ⅻ号レーザーが稼働を開始する前になされていた高速点火の発



明。故人はレーザーを使った核融合の中でも「高速点火」という新しい発明をされました。ノーベル賞受賞者であるニコライ・バソフ先生も似たような提案をしましたが、故人の提案はそれに先んじることで10年以上も前のことでした。故人のおもしろいところは、その後ご自分の発明をすっかり忘れられ、思い出したのは他の人が古文書を探し出して、発明者が故人であることを突き止めた時でした。まことに飄々とした学者先生でした。

三つ目は、レーザー核融合研究の重点化です。科学技術・学術審議会の中で、故人が発明された高速点火方式が有望であることが多くの方に認識され、大規模のプロジェクトが認められました。その際の故人のご活躍と卓見は「阪大はこんな優れた人を隠し駒としてもっていたのか」と多くの先生を感嘆せしめるほどのものでした。

故人には、もっと長い間、大所高所から我々を見守っていただきたかったところではありますが、学者としてもセンター長としても、やるべきことを成就された、誠に不幸せな方であったかと思っております。謹んでご冥福をお祈りいたします。合掌。